みんぱく若手研究者奨励セミナー　発表要旨

早稲田大学大学院文学研究科
人文科学専攻　博士後期課程
齋藤　理恵

ビデオを巡る映像人類学の探究

現代美術は今日も、混迷化を続ける社会状況に対する問題を提起する存在として、有効に機能しているのだろうか。21 世紀の現在、横文字の「アート」は文化政策やコマーシャリズムにより活況を迎える一方で、鑑賞者が主体的に作品の美的価値を見出せなくなってきている側面も見受けられる。これには、アートを「みせる」側の問題もあるが、同時に現在の複雑な時代背景も関与しているといえるだろう。あらゆる意味で異種混交な状態は、可能性を秘めていると同時に、分裂症的な状況をも作り出している。いま、現代美術を俯瞰すれば、極めて両義的で、揺らぎのある作品が多いのも、その表れであるといえる。

現代美術がそれまでの芸術と決定的に違うのは、多種多様なメディアを利用した作品の出現もさることながら、「美術」の概念を覆す活動が活発に行われる点にあるといって良いだろう。その発展過程においては、アーティスト自身が社会に対峙する一存在として、強烈なメッセージを放つケースもしばしば見受けられる。20 世紀を経て、美術は既存の美術館やギャラリーに保存することが困難な、「行為」や「行動」、あるいは作品制作の「プロセス」すら、「アート」として認識されるようになっている。

とりわけ、1990 年代以降、日本においても現代美術の国際展が浸透し、これまで歴史的に軽視されることの多かった美術作品が再評価され、現代美術の多様性が一部においては浸透しつつある。しかしながら、これには三つの問題点が皮肉にも付随する。第一に、様々な理念や時代の在り方に伴う作品群は現代美術に「免疫」の無い鑑賞者を混乱させ、一部の知識人の間の共通言語としてとしてしか機能しない危険性を孕む。第二に、現代美術の国際化が進むことにより、キュレーターや批評家によって発見された作品たちは、ともすれば見せ物のように扱われ、「アート」という文化資本のなかに回収され、やがては葬り去られる。そして第三に、国際展に関していえば、グローバル・スタンダードが暗黙の内に存在し、その評価基準から逸脱することのないような臆病な作品

や、テーマが乱立していることも否めない。例えば、昨今の現代美術のいわゆるビエンナーレ、トリエンナーレなどの大型国際展を俯瞰すれば、似たような趣旨にもとづき、どの展示を見渡しても同じような作家の名前が簡単に見つかる。それは、まるで次から次へと新作を公開するシネコンや、流行を安価で提供するファスト・ファッションブランドと、何ら変わるところが無いようにも見受けられる。

もちろん、現代の「アート」がそのような均質でグローバルな存在として世間に流通し、消費されている状態は、時代を反映する鏡として適切であるといえるかもしれない。しかしながら現代美術は、隠された境界や周縁化されたもの、周縁化を引き起こす権力の暴力性を明るみに出すことで、時にはマイノリティを肯定し、境界を開く役割を担ってきたのではなかっただろうか。同時に、時代背景を敏感に察知し、それに対する警鐘を鳴らしてきたのも、現代美術の役割だったはずである。

現代美術の受け手である我々が不感症になったのか、それとも現代美術とそれを取り巻く世界自体が盲目になっているのか、その判断を下すのは容易ではない。ただし、少なくとも現在可能な試みとしては、昨今の社会情勢とそれを取り巻く現代美術の在り方に着目し、分析することによって、現在進行形の「アート」とその表象可能性を具体的に論じることにある。

本発表では、1960年代後半に登場したビデオカメラによって、これまでマイナーな立場にあった人々が、自らを表現し、また社会と対峙するために、メディアを活用してきた事例を再検証する。ビデオが普及したことにより、既存の美術の在り方は急速に変化を遂げることになる。これは、まさに映像メディアという「モノ」を通じ、表現形態や価値観が大きく転換したことを体現している。

鶴見俊輔は、彼の著書『限界芸術論』(1999年、初出は1967年)にて、「芸術」を「純粋芸術」と「大衆芸術」という2つの概念に分けてとらえた上で、その2つを相対化する、「芸術と生活との境界線にあたる作品」を「限界芸術」と定義している。

純粋芸術とは、専門的芸術家による創造を、専門的享受者によって受容されるものであり、また大衆芸術は、専門的芸術を大衆が受け取るものである。そして、限界芸術は、非専門的芸術家によってつくられたものを、非専門的享受者が楽しむものである。ここには、今日、私たちが想起する「芸術」あるいは

「現代美術」に対して、新たなアプローチが提示されているといっても良い。

また、民族学者の梅棹忠夫も、1954 年に、「アマチュア思想家宣言」にて、同様な見解を示している。ここでは対象は「思想」そのものであるが、思想が西洋の体系に属するプロフェッショナルのものだけではなく、アマチュアの一般の人々の自由な使用に委ねる必要性を説いている。

本発表では、これまで高尚なものと捉えられていた芸術が、表現手段として、また、社会と積極的に交わる術として、ビデオというメディアを通じて一般の人々を取りこんできたことに着目し、それが 21 世紀の現在、どのような変化を絶えずもたらしているかを検討する。とりわけ、「映像」があまりにも身近になった昨今、人々はどのように映像から得られる情報に対して対峙しているかを、アナログからデジタルへとメディアが転換する現状のなかで分析していくことを目標とする。さらに、東日本大震災を契機として、現在、日本における現代美術がどのような局面を迎えているのかを、芸術文化と社会との関わりを通じて、新たな映像人類学の観点から論じていくものとする。